

## スペイン北西部ガリシア地方出土の中国陶磁器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9773">http://hdl.handle.net/2297/9773</a>

## スペイン北西部ガリシア地方 出土の中国陶磁器

宮田絵津子

ポンペウファブラ大学  
(Universitat Pompeu Fabra)

中国陶磁器の流通は唐時代の中東や東南アジアへの輸出にはじまり、14, 15 世紀にはその規模も拡大し、イベリア半島の両国つまりポルトガルとスペインがアジア進出を果たす大航海時代になると世界的な交易製品としてアメリカ大陸、ヨーロッパへ輸出されることになる。マカオを中国との直接的交易の拠点として構えたポルトガルはその正確な規模こそ知ることができないが、現在リスボンにあるアラメイダ財団、国立美術博物館、その他各地方にある博物館に所蔵される中国陶磁器の量からその輸入量が少なくなかったことが伺われる。

一方隣国スペインはフィリピンを植民地としてマニラにやってくる中国商人やマカオからやってくる船から中国商品を購入し、ガレオン貿易を通じてヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）へ物資を輸出し、さらに大西洋貿易によってアジアの商品の一部はスペインのセビリアへ到達しスペイン全土へ流通して行ったことが一般的に知られる。しかし中国陶磁器に関しては現在まで考古学的発掘による出土がほとんど確認されておらず、伝世品もマドリッドにある王宮の所蔵品、国立装飾美術館 (Museo Nacional del Arte Decorativo) の所蔵品が知られるのみであった。

今回の報告ではスペインの北西部に位置するガリシア地方内での発掘で出土している中国陶磁器を紹介するとともにその流通経路について考える。また、世界的に流通した中国陶磁器の中でこれらの出土陶磁器の16 世紀 17 世紀におけるヨーロッパ流通のなかでの位置づけを確認したい。

### スペイン国内の出土地域

現在までに中国陶磁器の出土が確認されているガリシア地方における地点はバイヨナ (Baiona)、ヴィーゴ (Vigo)、ポンテヴェドラ (Pontevedra)、サンティアゴ・デ・コンポステラ (Santiago de Compostela)、オレンセ (Ourense) の 5 箇所である ( 地図参照 )。前



ガリシア地方地図

3 箇所は海辺あるいは入り江付近に位置する場所だが、サンティアゴ・デ・コンポステラは海岸から 30 キロほど内陸に入り込んだ地点に位置する巡礼地として有名な街であり、オレンセはさらにヴィーゴの海岸地域から 100 キロ離れた内陸地にある街である。今回の報告では筆者が実見することのできたバイヨナ、ヴィーゴ出土の陶磁器に限定し、これらの地点から出土した中国陶磁器のタイプ構成、年代を考察するとともにこれらがどのような商業ルートを経てたどり着いたのかについて考えてみることにする。

### バイヨナ市の歴史

バイヨナは規模こそ小さいが、ガリシア地方の海岸地帯の中でも古くから良港として知られ、1425 年には更に北に位置する大きな港として知られるラ・コルーニャと並ぶほど重要な商業港となり、大航海時代にはその重要性は確実なものとなった。その港としての重要性は、有名なコロンブスがアメリカ大陸を発見した後帰港したのがこの港であったことからわかる。陶磁器の出土地点は 1992 年に行われた地下駐車場の建設地点であるが、現在の旧市街に位置し、中世から 1665 年まで “Vila Vella” と呼ばれた地区である。報告書によれば、陶磁器の出土が確認された層位は 14 世紀から 1665 年までの大幅な年代が与えられている。この最終年代は 1663 年に起こったポルトガルとの軍事的衝突に始まり、その後のポルトガル軍のガリシア侵攻に伴って 1665 年にガリシア地方の総督がこ

の町の300世帯を破壊することを命じたといわれている。従ってこの遺跡の下限は1665年頃ということになる。

### バイヨナ出土陶磁器

さて、この遺跡で出土している中国陶磁器は破片数にして15点。いずれも16世紀後半から17世紀前半にかけての年代幅に入るものである。器形としては大半が皿で、碗が2点。

写真1は縁に幾何学文を描きやや粗い胎土の皿の一部で、口縁部のみの出土だが見込みには通常珠追い獅子文が描かれるものが見られる。これは、16世紀半ばから16世紀第四半世紀頃にかけてのものと考えられる。

写真2は皿の口縁部分の一部で陵花になっており、菱形門の中に花文が配置されている。コバルトの色調はごく薄く、外面に描かれた獅子文のような文様もぼやけて輪郭がはっきりしない。アラメイダ財団のコレクションの中にこれと類似したタイプの壺が存在し、嘉靖年間のものとなっているが、16世紀半ばよりも少し下った時代のものと考えられる。

写真3と4は皿の一部4点で、草花文が描かれたものが2点、どれも外面の文様を見る限り、万暦のなかでも16世紀中に収まる年代のものと考えられる。

写真5は碗で、内面の口縁部分に水草と鷺文が丁寧に描かれ、外面は連続する草花文が描かれる。口部分は陵花になっている。こうした碗は内面の文様が同じで外面に鹿文を描いたものがサンディエゴ号の引き上げ品の中に見られるが、鹿文はウィッテレーウ号にもみられる。一方で、ポルトガルの嘉靖年製として分類されている皿にはこれと同じ文様が使われている。但し碗類における文様の使用例はいずれの嘉靖年間の製品にはみられない。また外面の草花文は芙蓉手の一種である。本タイプは、この2つの年代の間に収まるものとして、嘉靖年間から万暦年間に移り変わる時期から16世紀終わり頃までとみることができよう。

写真6は口縁部分に蓮葉文と草文が描かれ、裏面にはウサギ文が粗い筆運で描かれている。この表面の文様はメキシコでも多く出土しているタイプである。これより少し早い段階と見られるものが写真5の水草に鷺を丁寧に描いたものであるが、本タイプは退化した文様から見て、これより少し遅れてでてくる製品で

16世紀末ごろのものと考えたいが、裏面にウサギ文が描かれたものは出土例としては珍しく、あまり多く例を見ない。

写真7は八方文を縁部分に廻らし、見込み中央に鳳凰文を描いた皿である。このタイプは後述するようにメキシコ市の出土中国陶磁器のなかでも最も数の多いタイプのひとつであるが、サンディエゴ号の積載品には見られないことから16世紀終わりごろの製品としたい。

写真8は皿の見込みで鴨の文様がやはり粗い筆運で描かれたものである。縁部分は残っていないが芙蓉手の一種とみられる。16世紀終わりごろから出てくる芙蓉手はドレイク湾出土の例をみても比較的に文様も丁寧に描かれたものが多いことを考えるとこのタイプは17世紀はじめ頃のものと考えられる。

### ヴィーゴ出土の陶磁器

ヴィーゴの市街地は大西洋に面しており、現在は漁業とその加工の工場が林立している街として知られているが、その重要性は19世紀末から20世紀初めになって鯨の解体工場や鰯の加工業が盛んになってから台頭してきた街である。この街の中でAntigua CALLE HOSPITALとよばれ、軍の病院の解体作業の際発掘調査が行われ、16世紀から18、19世紀にかけての遺構と遺物が発掘されている。最も古い建造物は1553年に建てられたフランシスコ会の修道院と教会だが、これらの建造物は1589年に火災に遭い、全壊している。中国陶磁器が出土しているのは、修道院が建っていた時代の外壁で、16世紀に属する。また出土している12点の陶磁器は主に皿で、碗が1点出土している。

写真9は皿の見込みの部分で、花枝文を中心に芙蓉手のような装飾がその周囲を廻っている。ウィッテレーウ号の積載品の中にみられる芙蓉手のように様式化されていない文様からみると、16世紀末頃の年代が与えられる。

写真10は皿の縁部分で、文様自体は写真3にみられるバイヨナで出土している皿の破片と類似しているがバイヨナ出土のものは陵花になっている。外面には文様がなく、水平方向に線を2本めくらせている。年代に関しては写真3と同年代と考えられる。

写真11と12は写真6と同類で粗い水蓮文が縁に描



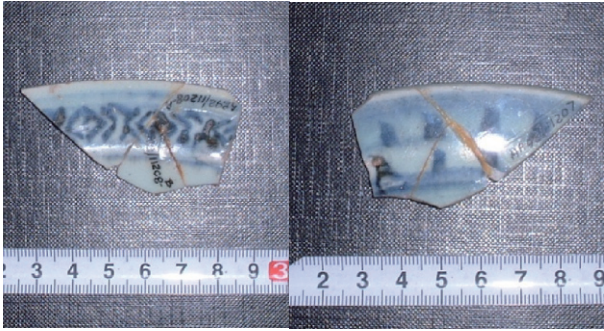


写真1



写真5

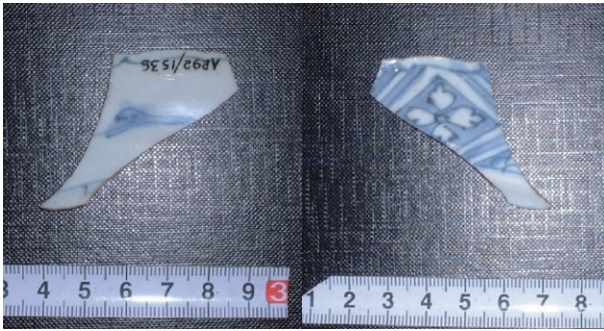


写真2

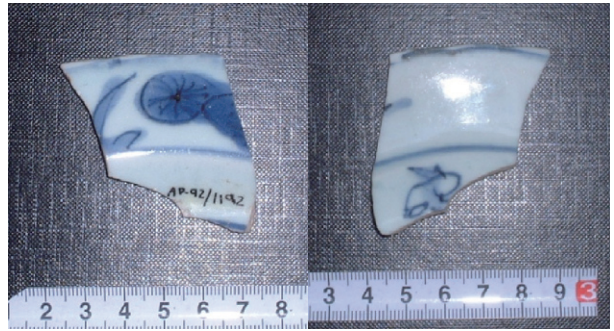


写真6

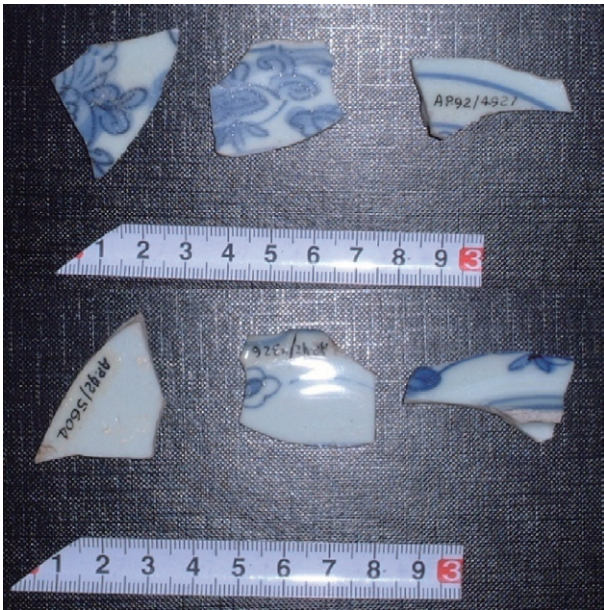


写真3



写真7

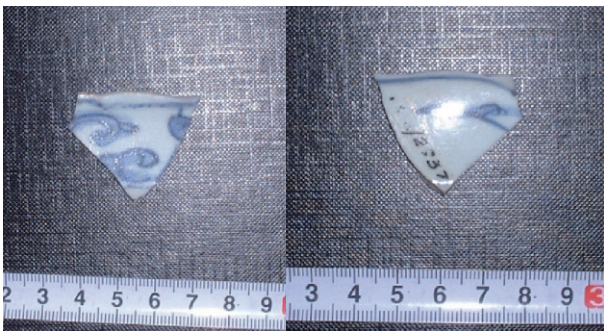


写真4

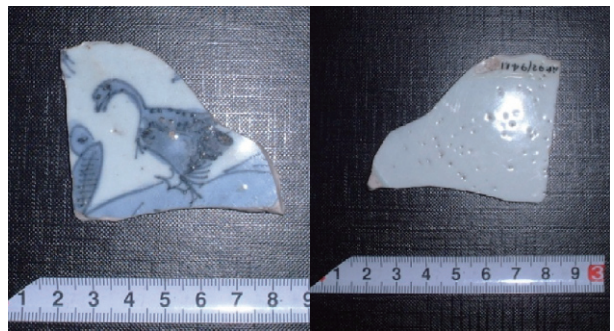


写真8



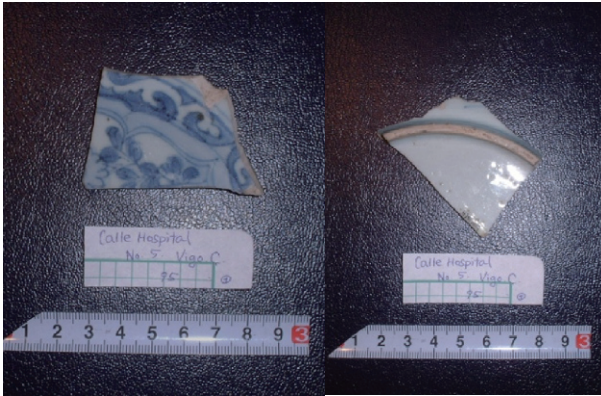


写真9



写真11



写真10

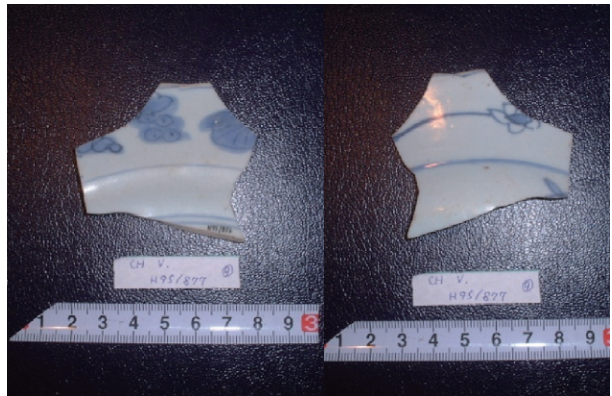


写真12

かれた皿の破片である。その粗い筆運からみるとドレイク湾で出土している水草文の描かれたタイプともサンディエゴ号に見られる皿とも異なっている。但し、こうした水連文はウィッテレーウ号の積載品の中には殆ど見られないので、16世紀末から17世紀はじめ頃に生産されたものであろう。

写真13は写真7と同じタイプの八方文の一部が描かれた皿の縁の破片で、普通見込みに鳳凰文が描かれる。このタイプはメキシコでも多く出土しており、ガレオン貿易で輸出された中国陶磁器の中でも最も一般的なタイプのひとつといえる。16世紀末頃になり多く生産され、輸出されたタイプとみられる。

写真14と15はいずれもサンディエゴ号に積載されていたものと同類である。従って16世紀末から17世紀はじめのころの製品といえる。

写真16は奇石と雲文に鹿を見込みに描く芙蓉手の皿の一部で、これもサンディエゴ号から引き上げられた陶磁器と同じタイプといえる。従って1600年を軸として16世紀末から17世紀はじめ頃の年代と考えられる。

写真17は碗の一部で灰色の粘性の低い胎土からできている。文様と形から17世紀後半から18世紀に入る時期のものではないかと考えられる。

#### 出土傾向

いずれの遺跡からも、大半は16世紀後半から17世紀初頭にかけての中国陶磁器が大半を占めていることがまず顕著な傾向として挙げられる。ヨーロッパにおいて好まれた康熙年製の陶磁器や五彩の陶磁器は出土していない。また、器形としては皿が圧倒的に多く、2つの遺跡から出土している陶磁器の中にはメキシコやアジアで出土するいわゆるE群と分類される16世紀第4四半世紀頃の碗やオランダの東インド会社が輸出したクラブムツェンと呼ばれる深めの鉢やメキシコで多く見られる17世紀後半から市場に出回るコーヒーやチョコレートの飲用に用いられるカップの類などが見られないことも特徴のひとつである。それ以外には福建省で生産されたものがみられないことがこれらの2遺跡に共通した出土陶磁器のタイプの傾向である。

## 流通ルート

こうしたガリシア地方出土の中国陶磁器について考えるとき、まず、出土陶磁器の年代幅が非常に狭いということが挙げられる。殆どの出土陶磁器は16世紀終わりから17世紀はじめにかけてのものであることがわかる。その後の康熙年間などの陶磁器は出土品の中にはみることができない。

今回調査した出土陶磁器の輸入ルートについては少なくとも下記の4つのルートが考えられる。

- ①ガレオン貿易を通じてセビリア、後にはカディスに到達し、国内に流通するルート
- ②リスボンからマドリッドへ輸出されるルート
- ③アムステルダムから輸入されるルート
- ④ポルトガル大西洋海岸沿いからガリシア地方へ渡るルート

上記の流通ルートについて考えるとき、前述した2つの遺跡からの出土陶磁器の中に17世紀半ば以降の陶片が存在しないことや16世紀半ば以降17世紀初めにかけての陶磁器が圧倒的に多いことからこれらの陶磁器がアジア進出をいち早く果たし、マカオを拠点に広東と直接交易を行っていたポルトガル経由で入ってきた可能性が非常に高いことを示唆しているように思われる。また立地的にもポルトガルと隣接しており、リスボンから船で商品が運ばれていったとも考えられる。オランダがヨーロッパに大量に中国陶磁器を輸出するようになるのは17世紀に入ってからで、16世紀後半の中国陶磁器となるとやはりポルトガルからの輸入というルートが妥当であると考えられる。さらに、出土している陶磁器のタイプが現在ポルトガルの各博物館のコレクションで見られるものと一致することも上記の説を支える。ただし、これらが正規のルート、つまりリスボンから海岸沿いに北上していく形で交易ルートが成立していたかどうかといった点についてはまだ不明な点が多い。ポルトガルの交易にしてもスペインの大西洋貿易にしても、高い入港税を避けるためにまずアソーレス島に船を停泊させ、そこで積荷を降ろし、リスボンやマドリッドへ向けて不法に物資を流通させていた密輸入ルートも存在していた。そこから海岸沿いにガリシア地方に他の商品と一緒に陶磁器が流れていった可能性も考えられなくはない。

ガリシア地方におけるこうした陶磁器の出土は、輸入された16世紀の時点でいずれも街の旧市街地に位

置する貴族の居館、修道院といった特殊な建造物に限られている。つまり一定の富を所有していた人々の所有物としての陶磁器で、日常的に使用されていたものではなかったことがわかる。スペイン北西部におけるこうした中国陶磁器の出土が16世紀以降のスペインの歴史においてポルトガルと接する海岸地域という地理的条件によって成立した特例なのか、それとも他のルートでセビリアから他地域に向けて中国陶磁器がスペイン国内に流通していたのかどうかといった問題については今後の研究の課題としたい。

## 参考文献

- Caramés Moreira, Vicente, Lozas Sevillanas en Baiona en los Siglos XV y XVI, "Glaucois" Boletín do Instituto de Estudos Vigueses, Vigo, Nº12, 2006
- Kuwayama, George, *Chinese Ceramics in Colonial Mexico* Hawaii University Press, Hawaii, 1997
- Ono, Masatoshi. 15, 16 *Seiki no Sometesuke Wan, Sara no Bunrui*, "Trade Ceramic Studies" No.2, Trade Ceramic Society, Tokyo, 1982, pp. 71-87
- Pijil-Keter, PL van der. *The Ceramic Load of the Witte Leeuw*, Amsterdam, RIJKS Museum, 1982
- Sheaf, Kolin & Kilburn Richard, *The Hatcher Porcelain Cargoes*, London, Phydou-Christies, 1989
- Von Der Porten, Edward P. *Drake and Cermeno in California: Sixteenth Century Chinese Ceramics*, "Historical Archaeology" 1972, pp1-20
- Azul e Branco da China, Porcelana Ao Tempo dos Descobrimentos*, Coleção Amaral Cabral, Lisboa, 1997
- Derroches, Jean-Paul y Goddio, Franck. *El San Diego; un Tesoro bajo el mar*, 1995
- Pinto de Matos, Maria Antonia. *A Casa das Porcelanas*, Cerámica Chinesa da Casa-Museu Dr. Anastasio Gonçalves, Lisboa, 1996
- Saga of the San Diego*, National Museum of the Philippines, 1993

## Special Appreciation,

A great appreciation in support of writing this article goes to Mr. Angel Acuña, Mr. Koji Ohashi and Mr. Vicente Carmés Moreira for kindly sharing their materials and knowledge. (The names appear in alphabetical orders)

(e-mail: etsukocarlos@yahoo.co.jp)